

Abstract

カルギル紛争における「核の作用」に関する考察

斎藤 剛（陸上自衛隊研究本部 主任研究開発官、拓殖大学大学院博士後期課程）

インドとパキスタンは、1998年の核実験後、99年のカルギル紛争と01-02年における危機を経験した。これら紛争・危機については、核エスカレーションの危険があったと指摘される一方、核の存在によって全面戦争が回避されたとの見方もある。かかる見解の相違の根底には、国際システムの構造やプロセスに関わる見解や「核革命」に対する認識の相違があると考えられるが、これら紛争・危機において核が如何に作用したのかという歴史的事実に対する評価の相違が、見解の相違を際立たせているものと考えられる。

かかる問題意識から、本稿では、核実験後最初に生じたカルギル紛争における「核の作用」の再評価を試みた。その結果、カルギル紛争では、核エスカレーションの危険からは終始十分に離隔していたこと、そして、「核の作用」は状況を安定させる方向に働くなど地域の安定にとってポジティブなものであったことを主張する。

『国際安全保障』第44巻第3号（2016年12月）89-107 ページ。